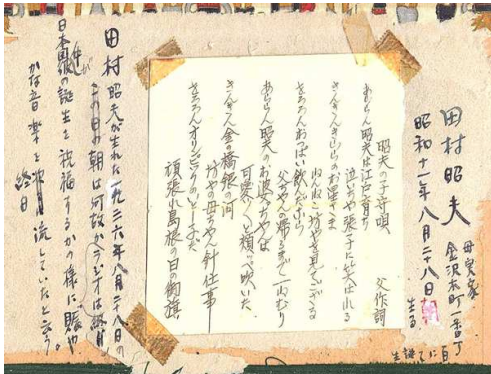


WV・3期の田村昭夫様(自称、ワングル0期)が、昨・2023年11月20日にお亡くなりになりました。また、一昨年秋には、同・鈴木 兵一様も。ともに、WV 創立にご盡力のお二人でした。

このページでは田村様についてを、続けて、右ページで鈴木様のことを紹介させていただきます。



(田村様アルバムより：田村様提供。)

田村様は、昭和11年に金沢市内で誕生。左のように、ご両親の愛を受けて幼少期を過ごされて金大へ入学。在学10年(休学の2年間を含む)で卒業。ほぼ自由人のようなお人でした。11期・加藤様の評、「訃報にビックリです。なんとなく、神農の如き不老長寿と思って」がまさにぴったりのお人でした。会津ご出身であったことから、会津と古い日本を偲ばれつつ、旧制高校の面影を愛し、四高(第四高等学校)卒と金大の一部OBで組織する月例「北の都会」ご常連でもありました。時に不調となられた際の「さようなら」賀状に驚かされ、或いは倭国大統領候補への出馬宣言などには、いつも愉しんだものです。



(田村様「さようなら」2015年賀状と、倭国大統領出馬宣言。)

管見 (日本再生の爲に)
一、大統領制にせよ。
一、首都を京都(北陸地域)にせよ。
一、鎖国し、自給自足の出来ぬ国にせよ。
一、鎖国し、自給自足の出来ぬ国にせよ。
一、農業・漁業・林業を立国にせよ。
一、社会階級を師匠・徒弟にせよ。
一、トラクタ、乗用車を追放せよ。
一、人から人と触れ合える生活様式として一律にせよ。
一、一人の人生の長さは100日とせよ。
一、安楽死を認めよ。
一、米等の収穫が、種を育て、平和憲法を死守せよ。
一、米等の収穫が、種を育て、平和憲法を死守せよ。
一、土地は全て公有にせよ。
一、狭い道を有効にせよ。
一、教育は旧制度にもせよ。
一、警察官は旧制度にもせよ。
一、警察官は旧制度にもせよ。
一、警察官は旧制度にもせよ。

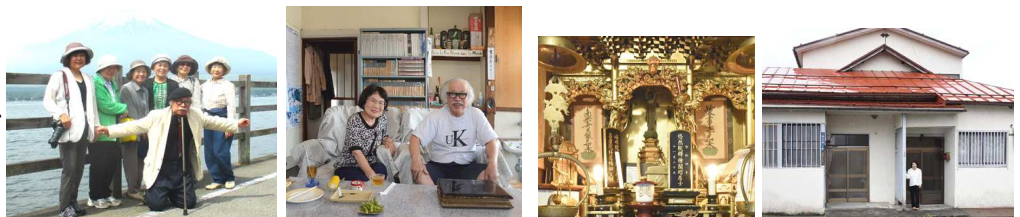


(「北の都会」にて涙を湛えつつ。)



(四高寮歌「南下軍之歌」碑前で。WV 田村・四十万・久富・長岡が碑を訪問。田村様が「南下軍之歌」を高唱しつつ、「超然太鼓」を。)

田村様は、会津藩歴代の筆頭家老・梁瀬家から出られた成一氏の作曲になる「南下軍之歌」を愛し、その楽譜を刻んだ歌碑建立に尽力なさいました。誰にも好まれて、お誘いも多々。一方では、どこまでもの包容力の奥様あったの田村様でもありました。しかし残念ながら、冒頭に述べたように、お位牌とされました。



田村さん、さようなら。(2016年河口湖で、4期清水様撮影。2017年ご自宅で。2023年5月、お位牌とお別れ時の奥様。)

(掲載写真で撮影者等のお名のないものは、筆者の撮影です。)

(前編同様に、HP上で拡大してご覧頂ければ、挿入図版の文字箇所も読み取れます。)

続けて、2021年11月9日にご逝去の鈴木兵一様につきまして。

筆者は、前ページでの田村様とは、コロナ禍少し前までの10年間以上に亘る毎月、「北の都会」でお逢いしていましたが、鈴木様とは、その帰路だったかの、田村様同道での一度だけでした。

WV現役時代には、WV創立のお二人のことを耳にした記憶はありません。一方で、その当時から、部誌『Bergheim』の毎年号にあった「創立のモットー」のことは、よく目にしておりました。



日光を浴びよ  
自然に親しめ  
浩然の気を養え  
民謡を唄え  
山に登れ  
伝説を取りもどせ  
祖國の土に穿く心魂を思え  
そしてさらに  
身体を健全にし  
厳格にして目を訓練し  
青春の精力を産費するな  
創立のモットーより

(立山で創部のことを語る鈴木・田村様。翌1959(S34)年5月末、大学祭休講利用の「奥能登一周徒歩旅行」。田村様アルバムより。)

OBとなって随分の年が経って初めて、この、新入生にとっての、新時代への思いが伝わる「モットー」とは、どなたが？と。以前に田村様にお聞きしたところ、「俺にはあんな文才はない。兵一の作。」との由で、3期・北様も同じようなお答えでした。

OBの諸氏には、どなたもが、「自身の頃が一番の」WVであったと思われます。筆者にとっては、犀川ダム上流に作られた倉谷ベルクハイム(BH)での日々や、3月の春山(雪山)合宿のことなどが。



(1968春山 白山鳴谷峠と1970別山PW。)

(1966(S41)年晩秋、部員で溢れていた時代のBH。春のBH小屋作業の賑わいと残雪の高三郎へ、2007年と2004年。)

幸いに、鈴木様の壮年期の写真もありました。最後の右写真は、老境のお二人ですが、何をお話してあったのか？同行の方々にもお聞きはしたのですが、7年前のことゆえ、何も判りませんでした。田村様・鈴木様とも、WVとともに、幸せな一生をお過ごしであった、と、筆者は思います。ご冥福を。



(2008年WV50年の鈴木様、7期 四十万様撮影。両隣りに都内・田村様も。)

冒頭で既述のように、筆者には、鈴木様についての情報は無きに等しく、そこで、3期の田村・北・熊松(竹谷)・北野(加藤)、4期の佐藤・清水、7期の村田・四十万、15期の舟田(西村)様に、写真や、色々お話しもお伺いしました。しかし、ここにご紹介の内容についての責は、総て筆者にあります。

拙稿ページは、全部が筆者の編集です。以前から、投稿は個人4ページ、写真は1ページに2枚まで(その挿入編集に時間を要す故か?)となっておりました。以前からですが、編集の労の低減に資するようと、小生は、自身で編集してPDFで提出しておりました。それゆえに、規定とは関わりなく、写真をたくさん掲出してあります。

先のWV65年総会では、「現行の冊子形式は65周年記念号vol.38をもって終了」が了解されましたが、本誌での仲村様による総会報告中にもありますように、小生から、「WV-HPに掲載される本誌vol.39以降での、皆様の個人投稿については、原稿とりまとめ編集(挿入写真の枚数制限なし)からPDF化までを、今後5年間は責任を持って協力します。(要旨)」と申し上げ、「拍手を以て可決(仲村様お書き)」されております。それゆえ、今後の何年かは、その様に致します。